

エッセイ

続々 アイ・ラブ・パリ

松村 茂治

第一話 「睡蓮」は、睡蓮にして、睡蓮にあらず

ー又は、フランスでの、列車の正しい乗り方ー

パリ近郊に位置するジベルニー村は、およそ百年前、印象派の画家モネが居を構え、そこに日本風の庭園を設えて、「睡蓮」の連作に取り組んだことでよく知られている。三年前のフランス旅行では、旅のお膳立てをしてくれた旅行会社のK氏の勧めにも拘わらず、そこを素通りして、ルーアンまで足を伸ばしたのだった。お陰で、思わぬ気づきを

経験し、モネに関心を持つようになったのだが、モネファンを自認するには、一度、ジベルニー詣でをすべきと考えたのである。

ジベルニーは、パリのサン・ラザール駅から列車で一時間ほどの所にあるヴェルノン駅で下車し、そこからバスで十五分ほどの所にある。パリから日帰りができることもあって、人気の観光スポットとなっている。もともと、日帰り可能と言っても、列車の本数が少ない上に、バスへの乗り換えが必要とあって、観光客の多くはパリから直行便のバスを利用しているようだが、私たちは、事情があつて、

不便な列車での移動を選択したのである。

これから述べることは、モネ鑑賞の本質とは関係ない話ではあるが、フランス旅行を考えている方には有益な情報を含んでいるので、若干ややこしい話にもなるが、ヴェルノン行き列車の発車時刻まで、少々お付き合いたただきたい。

今回のパリ旅行に関しては、その目的をスムーズに達成するために、私は「三本の矢」を用意することにした。

「第一の矢」は、パリでの移動を速やかに行うための定期券「パリ・ビジット」の購入である。これは、一日から五日の期間で、パリ市内及び近郊の乗り物（地下鉄、国鉄、バス等）が乗り放題になる定期券である。日本でも入手可能だが、手数料を取られそうなので、直接サン・ラザール駅に行つて、買い求めることにした。

この定期券は、カバーする範囲によって大きく二種類に分かれている。分かりやすさのために東京を例にすれば、東京都区内のみをカバーするものと、東京都内及び郊外それに神奈川、埼玉、千葉等近県の一部までをカバーするものの二種類である。いずれにも一日、三日、五日の三種

の期間が設定されていて、カバーする範囲が広く、通用期間が長くなれば、当然値段は高くなる。私が入手したのは、「近郊型・五日間」のビジットである。

今回の旅で私たちが宿泊していたホテルは、東京で言えば銀座辺りに位置する。目的地のジベルニーは、中央線で言うと「大月」辺りになるだろうか。日本式に考えれば、高尾まで通用する定期券を持つている訳だから、それを使って乗車し、大月駅で下車する際に、高尾からの乗り越し分を精算をすれば問題ないというか、それがわが国での普通の行き方と思うが、フランスではそれは通用しない。正確に言うと、それは「不正乗車」になるのである。定期の代わりに初乗り運賃で乗車して、下車駅で精算するといふのもご法度である。

乗り越し精算はできないと書いてあるガイドブックもあるが、なぜそうなのかの説明はない。また、不正乗車を防ぐために頻繁に検察が行われ、キップを持っていないと高額な罰金を取られると書いてある本もあるが、なぜキップを持たないで乗れるのか、いや、「キップを持っていない」というのがどのような状況を言っているのか、具体的には書かれていない。全くキップを買わないで乗ったら、

それは明らかに無賃乗車だが、高尾まで有効な定期を使って乗車中、高尾と大月の間で検察を受けたら、それも「キップを持っていない」と等しいことが分かって来た。「下車駅で精算するつもり・・・」という説明は受け付けてもらえないというか、乗り越し精算という概念がない（成立しない）のである。その根拠は、列車の乗降システムにあると私は考えている。

乗車するとき、地下鉄では、キップを自動改札機に通すとゲートが開いて入構可能となる。あとは、ホームに入つて来た電車に乗ればいい（車輛によつては、自分でドアを開けなければならぬという手間のかかる場合もある）。

国鉄の場合、日本式に言えば「緑の窓口」に行つて目的地までのキップを購入するが、これだけではまだキップとしては通用しない。ホームの入り口付近に、公衆電話ほどの黄色い機械が置いてあり、購入したキップをそこに挿入して刻印してはじめてキップとして認められることになる。わが国で、自動改札で「ピツ」とやつたり、昔なら、キップを買ったときに駅員さんがガチャンと機械を通して日時を印字してくれたのと同じである。あとは、行き先と一等車か二等車を間違えないようにして乗ればいいのだが、列

車の入線ホームは、発車間際になつて電光掲示板に表示されることになつていたので、よく見ていないといけない。それに、発車ベル（チャイム）というのもなく、時間になると、何も言わず列車は動き出ししているので、これはちよつと怖かつた。

このように、乗車時にいくつかの関門があるが、問題は、降車時にある・・・というか、降車時には何も無いというのが正しい認識であり、ここが問題なのである。

地下鉄では、「出口」と書かれた看板に従つていくと、出口のゲートは閉まっているが、人が近づくと自動で開き、キップの回収は行われない（スイカやパスモも機械に通さない）のである。キップの回収をしないのに、なぜゲートが閉まっているのか不思議だが、これは、そこから逆行して入ってくる人を防いでいるのだと思う。キップ一枚（約三百円）買って入つてしまえば、何処で降りるのも自由。つまり、一駅乗つても二、三十駅乗つても、同一料金ということになる。

国鉄も同様で、下車駅でプラットホームに降りたら、前を行く人に黙つてついて行けばいい。いつの間にかホームを離れ、駅舎から出ているのである。改札機もないし切符

回収の駅員さんもないのである。

我が国では、電車の利用に際しては、一般的に、入場時と出場時にチェックを受けることになつているが、フランスでは、入場時の刻印のみである。しかも、刻印をするかしないかは乗客任せなので、つまり、一人ひとりゲートでスイカを「ピツ」とやつたり、駅員にキップを見せたりしなくともホームに入れてしまうので、うっかりしていると刻印をしないまま乗つてしまうこともありうる。はっきり言つてしまえば（ここが、極めて大事な所なのだが）、キップを持たなくとも自由にホームに入れるし（多分、入場券という制度はない）、そのまま列車にも乗れてしまうのである。

これで、乗り越し精算が不正乗車になる理由が、お分かり頂けたことと思う。乗つてさえしまえば、下車時には何のチェックも受けない訳だから、どこまででも行けてしまうのである。そのことを知つていて（フランスでは、子どもでも知つているという前提なのだと思う）目的地までのキップを持たないのは、相当なワルということになるのだ。不正乗車の唯一のチェックは、車掌による検察ということになるのだが、検察時に、定期の圏外であることを告げら

れ、「下車駅で精算するつもりです」と言うのは、店のモノを手にしたまま外へ出ようとしたところをとがめられ、「今、払おうと思つたのに・・・」と言うのに等しいのではないかと考えるのである。

ところで、購入したパリ・ビジットを無駄にしない方法はなかつたのかと言え、ない訳ではない。それは、誰もが思いつく常識的な方法で、再び東京を例にすれば、定期を使つて高尾まで行き、そこで一旦改札を出て、改めてその窓口で、大月までのキップを買えばよいのである。しかし、フランス国鉄のダイヤは実によく出来ていて、高尾で列車は二分ほどしか停車しないから、外へ出たら、次の列車を待たなければならぬ。一番早い次の列車は二時間後に出るということを知つていて、さて、急がない旅とはいえ、ここで一旦外へ出て、切符の買い直しをするものだろうか。

最後に、大事なことを付け加えておこう。不正乗車のチェックは、車掌による検察のみであると述べた。前回の旅行では、長距離を移動したりフランス新幹線（TGV）を利用したりしたので、何度か検察に遭つているが、今回は、地下鉄でも国鉄でも、一度もなかつた。これが常態なのか

もしれないが、だからといって、車掌は来ないもののだと早合点してはいけない。

発車までに随分と前置きが長くなってしまった。私たちは、「大月」へ急ぐのであった。そのすぐ手前までの定期券を持ちながら、実に忌々しいことではあったが、「銀座」から「大月」までのキップを、かなりの部分を重複して購入し、車中の人となったのである。

そうそう、発車間際に、ちよつとしたトラブルがあった。私たちより少し遅れて乗り込んできた数名の人たちがいた。それぞれが席に着き、間もなく発車というときになって、そのうちのリーダー格の一人が、席に着いている人たちに何やら指示をして、座席を移動させているのだ。この車輛が指定席車輛だったら、私たちも移動しなくてはならない。車輛に乗り込むとき、「二等車」であることは確認したが、二等車にも指定席があったのか、急に心配になってきた。そこで、隣の座席に座っていた初老の男性に、「この席は指定席なのですか？」と尋ねたつもりだったが、だが、「あなたの言ってること、サッパリ分かりません」と言われ、悲しいかな、こういったところが言葉に不自由な人の常で、改めて、頭の中で文章を組み立て（と言って

も、単語たった数語のことなのであるが・・・）、再度尋ねると、「座席指定ではない」との答えが返って来た。先ほどの席の移動は、どうやら仲間内の席替えだったようだ。

ガイドブックには、ヴェルノン駅とジベルニーを結んでいるバスは、一日に四往復しかないと書かれているが、その肝心のバスが、どこから何時に出るのか、駅には何の案内もない。仕方なく、人々の動きを目で追っていると、彼らは大きく二手に分かれて動いているように見える。駅舎の真ん前に停まっているミニSL（自動車をSL仕立てにして数両の客車を引く、遊園地で見るとようなトロツコ列車様の乗り物）ロードトレインと言わらしい）に急ぐ一団と、少し離れた所に停まっている大型バスに急ぐ一団の二つである。なぜ二手なのか、全く分からない。分かっていることは、目の前のバスを逃したら、庭園見学は中止せざるを得ないということだ。なぜなら、来るときに買った往復切符の、帰りの列車は、三時頃に出ることになっているので、次のバスだと、たいした滞在時間は作れないからだ。列車のキップをよく見ると、二等車で、座席指定はないと書いてあるが、ヴェルノン発十四時五十三分の列車と書いてあ

るのが不思議だ。座席指定がなく、列車指定があるということは、我が国のJRではありうるのだろうか。座席が決まっていないのだから、来た列車に乗るといっただけではないのだろうか？混んでいたら、立っていればいいのだから・・・それとも、フランスでは一車輛に乗れる人数に制限があつて、それ以上は乗せないというルールでもあるのだろうか？このキップで、指定されている列車の次の列車や前の列車に乗ると、不正乗車になるのか、この乗車システムについては、まだ私は解明できていない。

ともかく、ロードトレインの屋根に、「二十分・ジベルニー・モネ」の看板を見つけ、これに乗れば連れてってもらえるだろうと判断したのである。数両連結の車輛は、いつの間にか、ほぼ満員の盛況になっていた。大型バスとの関係が気にはなつたが、ロードトレインのスケジュールが一日四本であることを確認し、これがガイドブックにある一日四往復と言うことなのだろうと独り合点（家内も一緒にだから、正確に言う二人合点）し、一路ジベルニーへと向かったのである。

モネの家に近づいた所で、我々を乗せた車が道端で停車していると、駅で、別の一団が乗り込んでいったと思われ

る大型バスが、砂埃をあげながら脇を通過していった。どうやら、大型バスが、「正規の」交通手段で、ロードトレインは地元のお兄さんの「夏休み期間限定営業」だったのかもかもしれない。バスより一、二ユーロ高かったような気がするが、田舎町を走る車としては、雰囲気は良かった。

ジベルニーまで足を伸ばして良かったと思うことが二つあった。

一つは、モネの家に残されている、膨大な数の浮世絵コレクションを目にすることが出来たことである。モネの時代に、フランスに「日本ブーム」があり、さまざまな日本の芸術作品や日常生活用品が入ってきて、この国の人々に多大な影響を与えたことは聞いたことがあったが、いくつもの部屋、廊下、階段の壁に掛けられた、多くの作家の手になる浮世絵には、目を見張るばかりであった。施設内の売店には、ここに所蔵されている浮世絵について解説した、比較的ボリュームのある出版物が置かれていたから、研究的な価値も高いものなのだろう。モネの絵を見に来たのに、そこで浮世絵を見て感動して帰るといいうのもおかしいものだが、そう思うのは、浮世絵がモネの中にもどのよう

に取り入れたれたか、よく分かっていないからなのだと思う。モネのことがもう少し分かってくると、もう一度ここに浮世絵を見に行きたくなるのかもしれない。

もう一つは、睡蓮と柳の池を見ることができたことである。もちろん、それを見るためにここまでやってきたのだから、当然のことなのだが、同じ絵を見ても、美術館で絵だけを見るのと、こうして描画対象と見比べるようにして見たときとは、受け止め方が随分と違ってきていることを実感するのである。

これは、三年前、ルーアンまで足を伸ばし、そこで大聖堂を見、その後、オルセー美術館でモネの手になる大聖堂を見たときにも感じたことである。そもそも、モネがルーアン大聖堂をモチーフにしていることさえ知らなかったのである。ルーアンに行っていないならば、オルセーの大聖堂の前は、素通りしていたのではないかとさえ思う。はじめは、「あれっ、見たことのある建物・・・ノートルダムだろうか」と思っただけで立ち止まったのである。絵につけられたプレートに、画家の名前と画題を読んで、そこにあった数枚の絵を見比べて眺めたのだった。

そして、帰国後しばらくして、箱根の美術館にも大聖堂な柳の木・・・と、すでにお馴染みの光景を目の当たりにしながら、実際の風景と絵とは、全く別の世界に属するものであるということを感じ始めていた。

今回の旅から帰ってから偶然手にした辻邦生作品集の中に、「クロードモネの世界」という、短い評論文を見つけた。その冒頭に、モネが、アメリカの女流画家に向かって語ったという、次の文章が紹介されていた。

「外光のもとで絵をかくときには、あなたは自分の前の対象が何であるかを忘れなければいけません。樹木であれば、野原であれば、その他どんなものであれ、そしてただ思うのです、ここには、小さな青い四角がある、ここには、ばら色の帯がある、あそこには、黄色の線がある、という風に。それからあなたの眼に見えたようにだけ、色彩と的確な形態とで、描いてゆきなさい。それが、眼の前の情景の、純粹な、あなただけの印象となるまで、描くのです」

オルセーで「ルーアン大聖堂」を見ただけだったら、あるいは、オランジュリーで睡蓮の「大壁画」を見ただけだったら、モネのこの言葉は理解できなかったと思う。今ならよく分かる・・・描画対象と作品とを見比べるという経験をして初めて、この言葉の意味を実感を持って理解で

が一枚あることを知って見に出かけた。そのときのことを「琅・第二十六号」に掲載すべく、文章を認めているとき、次第に明確になってきた印象を簡潔に表現すれば、オルセーの大聖堂は、ルーアン大聖堂にしてルーアン大聖堂にあらず、というものであった。

「第二十六号」にも書いたことだが、石造りの大聖堂は、見るからに重厚・硬質で、陽の当たっている部分と陰の部分とのコントラストの強さが印象的だった。それに対し、キャンバス上の大聖堂は、形は、辛うじて大聖堂の姿を留めているが、作品によつては、砂か砂糖で出来ているように、今にも溶けて崩れそうである。あのシャープな陰影のコントラストも、淡い雲か煙のように変容している。当たり前のことなのだが、絵を描くということが、対象をできるだけ正確に映し出すのとは、全く別の行為であるということも、改めて知ったような気がしたのである。

「大聖堂」のときは反対に、「睡蓮」に関しては、実物より先に、オランジュリー美術館の大壁画をはじめ箱根やマルモッタン美術館で、「睡蓮」の連作を見てきた後で、描画対象の実物を目にするようになったのである。日の光を反射する池、水面に浮かぶ蓮の葉、池に陰を落とす大き

きるようになったと思うのである。

第二話 ヴェルサイユの朝顔

―又は、宮殿訪問者のための大事なお知らせ―

パリの中心部からヴェルサイユ宮殿に列車で行くには、大きく分けて三つの行き方がある。到着地点で言うと、「ヴェルサイユ右岸駅」を利用するか、「ヴェルサイユ左岸駅」を利用するか、「ヴェルサイユ・シャンティエ駅」を利用するかの三つである。「シャンティエ」という言葉には、「工事現場」という意味があるので、貨物列車に乗せられそうな気がしたのと、駅から宮殿までの道のりが随分と長いような気がしたので、そこは外して、「右岸」か「左岸」のどちらかにしようと考えたのである。そして、駅から歩く時間が最も短いという理由から、「左岸駅」を選んだのである。ガイドブックと相談して決めたことだが、この選択が間違いの始まりであった。

私が用意した「第一の矢」、郊外型の定期券は、「左岸駅」も「右岸駅」カバーしているので、どちらの駅を選ん

でも問題はなかった。そして、このヴェルサイユ宮殿行きには、「第二の矢」が活躍するはずだったが、結果的には、これは全く役に立たなかった。

私が用意した「第二の矢」は、「パリ・ミュージアム・パス」という、パリ市内および近郊にあるおおよそ六十カ所の美術館や博物館、宮殿などで使えるフリー・パスである。これを持つていれば、施設に行つてから窓口に並んでチケットを買う手間が省けるので、混雑するところでは威力を発揮するはずである。もちろん、パスは、ヴェルサイユ宮殿もカバーしている。

このように、準備万端整えてで出かけたはずだが、いきなり、問題に出くわした。ホテル前の地下鉄駅の自動改札を入つたところで、上り下りのホームを間違えたことに気づいたのだ。日本式に考えれば、向かい側のホームに来た電車に乗れば問題はないのだが、ここでは、向かい側のホームに行くには、一度改札を出て駅員に事情を説明し、一度入構のキャンセルをしてもらつて、新たに入り直さなければならぬのである。多少余計な時間を費やすことになったが、まだ、それほどのことになるとは思つていなかった。

なので、「この方向でいいのだ」と安心したのだが、なぜ、手書きのマジックなのか、もつと疑うべきだったと、後になつて思うのである。そもそも、私たちが降りたのは、アンバリッド駅であり、ジャヴェル駅ではなかったはずなのに、早く国鉄に乗りたい一心から、二つの駅を混同していたのだ。

人の流れは、その矢印に従うように階段を上り、地上へ向かつていく。きつと、地上に出れば、目の前にフランス国鉄の大きな駅舎があるのだろうと期待していたのだが、それらしい建物は見当たらない。出たところは、広い公園の一角で、道路には数台のバスが並んでいるだけである。

道端の屋台でクレープを焼いていたお姉さんがいたので、「ジャヴェルまで行きたいんだけど・・・」と聞いてみると、「そのバスに乗るのよ」と教えてくれた。「歩いでは行けないの?」と聞き返すと、「普通は、歩かないわねえ・・・」との答えだった。地図を見るとジャヴェル駅までは、地下鉄を乗り継いで五、六駅はある。

後になって、何冊かのガイドブックを見てみると、どこにも、地下鉄アンバリッド駅が国鉄への乗換駅とは書いてない。正規の表示がないのは当たり前なのだ。つまり、サ

途中の乗り換え駅で、次の混乱があつた。持っていたガイドブックには「ヴェルサイユへは、国鉄C5号線で終点下車・徒歩五分」と出ているが、この電車にはこの駅に行つたら乗れるのか書かれていない(このガイドブックは、誰もが利用する著名なものだが、武士の情けで名前の公表は控える)。路線図を見ると、ホテル前を通っている地下鉄は、四駅ほど行つたアンバリッド駅で、C5号線と交差しているのだ、そこが、地下鉄・国鉄の乗換駅になつていふと思つたのだが(我が国の路線図なら、明らかに乗換駅と理解できる)、早とちりであつた。

地下鉄から国鉄への乗り換えなのだから、新宿駅で丸ノ内線から中央線へ乗り換えるようなものと思つていたのである。当然、地下鉄を出たところに、国鉄への案内表示があるはずだが、全く見当たらない。そこで、「おかしい」と思うべきだった。しかし、私たちと同じような、観光客風情の人たちが、ぞろぞろと一定方向に向いて歩いて行くので、その流れに身を任せたのである。すると、妙な表示が目にとまった。通路の太い柱に、サインペンの手書きで「ジャヴェル」の文字と方向を示す矢印が書かれていたのである。ジャヴェルというのは、C5号線にある駅の名前

インペンの手書き表示は、私たちの他にも、パリの中心部から、宮殿に行くために国鉄C5号線を求めて、ここアンバリッド駅までやってきた人がいたことを示しているのに違いない。しかし、直近の国鉄駅はジャヴェル駅であり、そこへはバスを利用しないと行けないのだ。だからと言って、「ジャヴェルはこつち」の表示が間違ふということではない。「バス経由で」とは書いてはないが、「歩いて行ける」とも書いてはないのだから。

バスに乗り込んでしばらくすると、どこにいったのか、運転手が乗り込んできて、ようやく出発となつた。細かい話だが、私たちは、パリ・ビジットを持っているので、乗車時にそれを読み取り機に挿入したが、運転手が不在なのをいいことと言つたらいいのか、もともとそういうシステムなのか、後から来たほとんどの客は、何もしないで乗つてきた。

クレープ屋のお姉さんが言う通り、ジャヴェル駅まで歩いて行くのは無理のようだった。バスの乗車時間は二〇分を優に超えていたから。そんなことより、ここまで、想定外の時間がかかっていることが気がかりだった。

ジャヴェル駅は質素な田舎駅といった風情で、トイレは

ありそうになかった（駅前に、パリご自慢の公衆トイレがあることには気づいていたが、日本人の感覚からすると、ちよつと使う気にはなれない）。間もなく始発列車が入ってくるという案内があったので、列車のトイレを利用することにした。ジベルニーに行ったときには、それが可能だったから。だから、列車に乗り込むと、トイレのよく見えるところに席を取ったのである。発車前に確認に行ってみると、「停車中の利用は禁止」との表示がでているので、発車まで待つことにした。

発車するとすぐに、隣の車輛から、お兄さんがやって来た。トイレのドアに手をかけ、開けようとするが、開かない。彼は、中に利用者がいると判断したらしく、トイレ前の座席に腰を下ろし、利用者が出て来るのを待っている様子である。しかし、私は、この車輛に乗り込んだときから見張っていたのでよく知っているのだが、そのトイレには誰も入っていないはずである。

しばらくすると、私たちより年配と思しき婦人が、同じように隣の車輛からやってきて、トイレのドアに手をかけた。もちろん開かない。先ほどのお兄さんの前の椅子に腰を下ろすと、声は聞こえなかったが、「使用中のよう

すよ」「あら、あなたも・・・じゃあ、中の人、大きい方かしら？・・・」などとやっていたのだと思う。ときどき、思い出したようにドアに手をやり、ガチャガチャやっていたが、何をどう悟ったのか、やがて二人とも、もと来た車輛の方へ戻って行った。

列車のトイレは使えないと理解した私たちは、「左岸駅」に着くと、駅員らしきお兄さん（私服なので分りにくい）を見つけ、この近くにトイレはないのかと尋ねたのだ。乗換駅と車内と、二回も機会を逸しているので、事態はかなり切迫していた。

ここは、一日に、世界中から何千、何万もの人たちが押し寄せる、世界的観光スポットの玄関口の駅である。ルイ十四世が使うようなものを用意せよと言うのではない、一般庶民の使う程度のものでいいのだから、当然あると思っ

て聞いてみたのである。返って来た答えに、耳を疑った。「駅前の道路の向う側に、スタバとマックがあるから、そこを使ったらいい」と言うのである。わが国には、他人の権で相撲を取るという言い回しがあるが、ここでは、他人のトイレで用を足すという表現が成り立ちそうである。

ここでお兄さんとそんな文化論を戦わせている時間的ゆてるような状況ではなかった。席へ取って返し、妻に何と云ったか覚えていないのだが、外へ飛び出すと、とりあえず隣のマックへ向かったのである。しかし、そこはスタバ以上に列が伸びていた（個室がいくつあったのか確かめては来なかったが）。

マックを出ると、足は自然と人通りの少ない方に向くのがあった。広い並木道があり、街路樹の落ち葉を掃いている清掃員のおじさんが見えたので駆け寄って、この近くにトイレはないかと尋ねると、黙って首を横に振るのみである。そのとき、おじさんの肩越しに一軒のカフェが目に残った。混んでいるようには見えなかったで、そこに最後の望みをかけたのである。走り寄り、ドアに手を掛けたのだが、無情にもドアは開かない。混んではいけないはずで、開店前だったのである。

これで覚悟は決まった。つまり、人間としてやるべきことはすべてやったということである。

先ほど、清掃員の所に駆け寄るまで歩いて来た方を眺めると、そこは石造りの大きな古い建物になっていて（後で調べてみると、国立の高等建築学校で、元は宮殿の厩舎と

とりはない。私たちの生理的欲求は、かなり危険な水準に達していたのだ。言われた通り、駆け足でスタバに向かい、家内はトイレに直行し（後で聞くと、家内はもうダメかと覚悟をしたとのであったが、奇跡的に人間としての尊厳は守れたとのことだった）、私はカウンターでコーヒーを注文し、席について家内が戻るのを待ったのである。

家内がトイレに入ったときには、ドアの外には誰も待つてはいなかったで、すぐに出てくるものと思っていたのだが、彼女はなかなか戻って来なかった。心身のあまりの緊張に耐えられず、中で悶絶でもしたかと心配し始めた頃、ようやく戻ってきたので聞いてみると、外からは見えなかったが、中に入ると数人並んでいたのに加え、個室の中に手洗いが設けられているような造りになっているので、一人が個室を占拠している時間が長くなってしまい、回転効率がすこぶる悪いとのことであった。

家内と入れ替わるようにしてトイレに向かうと、いつの間に入ったのか、四、五人の女性が並んでいた（つまり、男女共用ということである）。家内が言う通り、一人入るとなかなか出て来なかった。ようやく一人出てきたときには、私の保水能力は限界に近づいていて、あと三、四人待

見した。そこを指して一目散に駆け寄った私は、気づくと、厩舎の馬になってしまっていた・・・。

スタバへ戻り、待っていた妻に経緯を話すと、しばらく戻らなかったのも、警察にでも連れて行かれたのではないかと思っていたとのことであった。私としては、最後の最後まで、考え得る限りの努力を試みていたのである。ともかく、自らの人格を貶め、日本人としての誇りをも打ち捨てることによって、ようやく宮殿を指すことができるようになったのである。

宮殿前の正面中庭に立って驚いた。果然というのは、このようなときに使う言葉であったことを再認識した次第である。スポーツ観戦であれコンサートであれ、これほどの人が入場を待っているというのは初めて目にする光景だった。縦横それぞれ百メートル以上ある広場を、人々が十重、二十重の蛇行する列となって埋め尽くしているのである。

気を取り直し、こういふときこそ、「第二の矢」がものを言うはずと、近くにいた黄色い帽子を被った会場係のお姉さんに、水戸黄門の印籠よろしくパスをちらつかせながら、「これがあるんだけど、何処に行ったらいいの？」と

だ。

いっしか、私たちの身体は、この国の文化事情にすっかり馴染んできていた。つまり、その場所を探すのは、欲求を感じてからでは遅いのであって、列を作って待っているうちに次第に身体の方が追いついてきて、順番が来る頃に程良い欲求を感じるようになるというのが、ここでの正しい生理処理の方法であるということを得しつづけた。

しかしながら、周囲を見渡しても、手持ちの地図を開いても、肝心のその場所が見当たらない。だからと言って、ここで建物の窪みを探す訳にもいかない。かなり神経過敏になってきたからだと思うのだが、目が慣れてくると、蛇行する人の列を横切るようにして、どこぞ遠くに消えていく親子連れの姿に気づくようになった。そこで再度、黄色い帽子のお姉さんを探まえて尋ねてみると、トイレは、親子連れが目指す方、宮殿に向かって左手の建物の中にあるという。

そこで、まだ身体の方は欲してはいなかったのだが、左手に見える建物の入り口の前に出来ている列の後についてみたのである。しばらくして、少し様子がおかしいことに気づき、すぐ前にいた家族らしき一人に、「この列

期待を込めて尋ねると、「列の最後についてください」と、ここでもまた、人を宮殿から厩舎に突き落とすような返事が返ってきた。つまり、広場を埋め尽くした人たちは、私たちと同じようにパスを持っているか、すでに窓口で入場券を買った人たちということになるらしく、第二の矢は、いとも簡単にへし折られてしまったのだった。

ヴェルサイユだけがパリではないので、ここは別の日に直すことにして他に行かないかと、家内に持ちかけたのだが、列は動いているからそのうち入れるだろうと、忍耐強い返事が返ってきた。確かに、人はどんどん入れているらしく、列は進んでいるのだが、その遅々たる動きに、いつになったら入れるのか、心許ないことこの上ない。この日は、幸いなことに、曇り空だったので、石畳の上で干渉らびることはなかったが、真夏のこの時期、好天だったら、と思うとぞっとする。陽を遮るものが全くないのだ。しかし、それ以上に心配なのが、生理的欲求の始末のことであつた。先ほどのスタバ経験が、ほとんどトラウマ状態となっていて、下腹部に違和感が残り（これは、心理的なものだったかもしれない）、胃の辺りがキリキリと痛むのである（これは修辞上の表現ではなく、本当に痛かったの

はトイレのための列ですか」と聞くと、「私たちは、チケットを買うために並んでいるんですが・・・」との返事が返って来たので、列を離れ、もう一度、黄色い帽子を探し出して、ようやく、チケットの列が出来ている隣の出入り口が、目指す所だということが分かったのだった。我が国だったら、目の付くところに、必ずやトイレの表示がある訳だが、そういうもてなしの心はなさそうである。

入り口が見つかった所で安心してはいけない。あくまで、そこは建物の入り口であり、中の様子は未知数なのである。入ってみると案の定、壁に沿って十人近い人が並んでいる。普通の個室と車椅子用の個室の全二室が、フル稼働しているが、一度にさばける人の数は最大でも二人である。

この程度の行列は想定内のことなので、余裕を持って並んでいたのである。すると、突然、どこからか、フランス語で叫ぶ女性の声が聞こえてきた。声のした方を見ると、カメルーンかコートジボアールあたりだろうか、アフリカのフランス語圏からやって来た旅行者と思われる、原色を基調とした民族衣装を身につけた大柄の女性が、トイレに並ぶ一団に向かって、大きな声で叫んでいるのである。よく聞いてみると、「トイレは、この奥にも、二階にもあり

ます。特に、男性には、奥に男性用のトイレがあります」と教えてくれたのだった。このときほど、フランス語を学んできて良かったと思ったことはなかった。教えに従い、奥に行ってみると、確かに大きな部屋の壁に沿って四つ、五つのアサガオが並んでいて、人は誰もいなかった。私がある一つを占拠していると、先ほどの女性の声に促されたと思われるオス蜂が数匹やってきて、一匹ずつアサガオに留まった。

こうしてトイレが使えたことは有難かったが、それでいいのかと思うのである。ここは、観光立国を標榜する国ではなかったか。その国が、外国から来た観光客にトイレの案内をさせるようなマネをしていいのか。わが国なら田舎の駅でも近所のスーパーでも、男性と女性を示す人形をあしらった表示が、建物内によく見えるところに掲げられている。どうして、そんな簡単なことが出来ないのか不思議だ。

こんな話は、いいかげんにしてくれと言われそうだが、ここまで書いて来たので、最後まで続ける。

宮殿に入るとすぐのところにトイレがあったと思うが、

そこを利用することはなかった。のぞいてもみなかったが、多分、大行列だったと思う。

鏡の間、王の寝室、戦いの回廊・・・と、有名どころは一通り見て来たが、王の雪隠というのがあったのかどうか、覚えていない。

建物の外れまで来たとき、レストランがあったので、そこで食事を取ることにした。時計を見ると一時過ぎ、身体を休めるにもちようどよい頃だった。入り口で、日本語で案内をしている女性がいたので尋ねてみると、トイレは中にもあるということだった。メニューより先に、トイレの心配をするあたりに、この国の文化に対する私たちの馴染み具合を察していただきたい。

レストランは、テーブル席とスタンド形式の軽食席を併せて百人以上収容できそうな規模だった。出るときにトイレに寄ってみると、順番待ちの列ができていたが、四つの個室が設えられているので、人の回転はスムーズだった。要するに、これくらいの数が、レストランの（宮殿ではない！）収容人数に対する適正規模というか最低限の設備ということになるのではなからうか。

ヴェルサイユは、宮殿も巨大だが庭園も広大である。ルイ十四世は、目の届く範囲すべてを「朕のもの！」と宣言したのに違いない。だから、庭園散策にあたって、あらかじめ地図でその場所を確認しておく必要がある。

あまりに広大だったことと通路がやや複雑な造りになっている所もあって、何度か位置を見失うこともあったが、木陰に人目を避けるような振る舞いをすることもなく、宮殿近くまで戻って来ることができた。そこで、散策前に確認しておいたトイレを利用することにしたのだが、あまりのお粗末さに、思わず失禁ではない、失笑を禁じ得なかった。写真を見ることができれば一目瞭然だが、まさかあそこで写真を撮って来る訳にはいかない。

二人並んで用を足すようになっていて、二人の間には簡単な仕切りがある。問題は「出先き」である。つまり・・・当然、そこにあるべきアサガオがないのである。どうするかと言うと、正面の壁に向かって直接放水せよというのとらしい。壁に当たった聖水は、そのまま壁を流れ落ち、足元の溝を伝って、小さな穴に吸い込まれていくという仕組みになっている。その足元の溝は、極めて上品に出来ていて、つまり、立っている靴のつま先からわずかな角度の

傾斜がつけられているだけなので、放水量によっては溢れださないか心配になるほどである。

確かに、子どものころ、学校や駅のトイレでは、この種の直接放水形式が採用されていたと記憶するが、二一世紀の天下のヴェルサイユで、この方式はなんとも落ち着かないのである。

トイレを済ませて帰路に着こうとしたところで、異様なものを目にしたのだった。宮殿と大運河の間に広がっている芝生の広場（確か、「緑の絨毯」と呼ばれている一画ではなかったか）の外れに、ちよつとした建物くらいの大きさの、鉄の構造物と大きな岩の塊が置かれているのである。当初、それは何かの工事の途中で、いずれ埋設されるようなものなのだろうと思っていたのである。鉄は真っ赤に錆びていたし、とてつもなく大きく、庭園には不似合いな感じがしていたから。大きさは、高さ十メートル、長さはその四、五倍。その形は、サキソフォンの開口部のようなだったといえ、イメージが湧くだろうか？そして、開口部の反対側は、タンクのような形状になっていて、何かを溜めておくための施設のように思われた。

開口部を正面から見ているうち、次第に、その意味が明確になっていった。どうやらこれは、工事中の建築物ではなく、芸術的なオブジェなのではないか、もつとはつきり言ってしまえば、これは、鋼鉄でできたアサガオに違いはないと思うに至ったのである。一瞬、実用か？という思いも過つたが、そうではなさそうだった。観光客の中には、近づいて眺めまわし、ニヤニヤ笑って去って行く人もいるので、益々アサガオのオブジェとの思いを強くしたのである。よく見ると、傍らに、作者らしき人の名前と「ダーティコーナー」という作品名まで書かれてある。まさに「御不浄」……。この地を踏んだ芸術家が、おそらく私と同じ経験を強いられ、苦い思い出のよすがに、ここにはこれくらいのアサガオが必要とのメッセージを残したのではないか。つまり、このオブジェには、「ヴェルサイユに薔薇は要らない。ここに必要なのはアサガオだ」とのメッセージが隠されているように思えてならないのだった。

そうと分かっているように展示してはいたら、ヴェルサイユもなかなか粋な計らいをすと思ったのだが、それは、この日一日、トラウマに苛まれてきた私の思い過ごしであつたようだ^(注)。

【後日談】

帰国して一日か二日たつて、朝日新聞に「立ち小便罰金三倍の一万八千円」の見出しのニュースが掲載された。絶妙のタイミングなので、一瞬ヒヤリとしたが、翌年に五輪を控えたりオデジャネイロのことであつた。『大きなイベントや人混みでの迷惑行為に歯止めをかけた』という市当局者の談話と、『立ち小便は、大都市の衛生環境を脅かす大問題』という市長の談話まで載っている。当局及び為政者に申し上げたい。立ち小便は、好きでやっている訳ではない、やる方だって、辛いに違いないのだ、私はよく分からなければならない。談話の主たちは、罰則によって生理的欲求がコントロールできると、本気で思っているのだろうか。リオの方々に、立ち小便をなくす一番良い方法を教えてさし上げよう。それは、罰則を強化するのではなく、トイレの数を増やすことである。それが出来ないのなら、リオはオリンピックなど開催してはいけないということだ。

さらにその数日後の新聞に、二〇二四年のオリンピックの候補地に、ロサンゼルス、ローマ、ブダペスト、ハンブルクに加え、パリの名が上がっていることが報じられた。今、リオについて言ったのと同じことを、パリについても

帰りは、来るときとは別の、「右岸駅」始発の列車を利用することにした。「左岸駅」だと、スタバとマックの前を通ることになり、必ずやトラウマがフラッシュバックし、痛む胃に一層の圧力をかけると考えたからだ。

宮殿から歩いて一五分ほどの所にある駅なのに、宮殿の喧噪が嘘のように、閑散としている。もちろん、駅に構内トイレはない。

駅を出た列車はしばらくの間各駅停車だったが、途中から急行になり、あつという間に、サン・ラザール駅に着いた。こんなことなら、来るときにも、この駅を利用すれば良かったと思つたのだが、後の祭りである。「宮殿までは駅から五分」という甘い言葉に惑わされ、「駅まで何分か」ということまで確かめなかつたわが身の甘さを恨むのみである。

サン・ラザール駅は、ホテルに近いことに加え、モネが何度もその作品に取り上げたこともあつて、親しみを感じてきた駅である。その二階には有料(一人、〇・七ユーロ)だが入りやすいトイレがあるのも親しみを増している。そこでこの日の仕上げをして、ホテルへ向かつた。

言っておこう。新競技場建設もエンブレムのデザインも、気になるところだが、駅、公園等に使いやすいトイレが作れないようなら、潔く立候補を辞退していただきたいと切に願うのである。パリ市内に公衆トイレを四〇〇も造つたと自慢しているようだが、それが本当に自慢できるものであるのかどうか、一度、日本のトイレ事情を調べに来ていただきたいと思う。これは、パリ憎しから言うのではない。表題通り、私は、パリを愛しているのである。我が愛する花の都が、この程度のことでは世界の矚目をかうような目に遭って欲しくないから、敢えて言うのである。ヴェルサイユだけでなく、パリにもアサガオを！

(注) このオブジェについては、ネットで、「ヴェルサイユ ダーティコーナー」とキーワードを入力し、検索して確かめてほしい。近寄って来た人たちがニヤニヤしながら見上げていた理由も自ずから分かつて来る。